斎藤 栄

長編本格推理小説

羅生門殺人旅情

NON NOVEL

長編本格推理小説

羅生門殺人旅情

斎藤 栄

NON NOVEL

祥伝社

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—220

長編本格推理小説 羅生門殺人旅情　定価690円

昭和61年10月25日　初版第1刷発行

著者　斎藤栄

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社

東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03（265）2081（代表）

印刷　図書印刷

製本　ナショナル製本

万一，落丁・乱丁がありました場合は，おとりかえします。　Printed in Japan.

ISBN4-396-20220-2　C0293　¥690E

© Sakae Saitō, 1986

長編本格推理小説

雅生門殺人旅情

厨藤 栄

NON NOVEL

祥伝社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

目次

一章　京都の宿……7
二章　小早川警視正……32
三章　容疑者……56
四章　怪しい人々……79
五章　蓮台寺温泉の殺人……103
六章　愛の相関関係……127
七章　謎のモデル……152

八章　幼い人質……177
九章　復讐の花……201

カバー&本文イラスト・加藤孝雄
カバー構成・EE大林真理子

一章　京都の宿

1

旅荘〈八十八〉は、烏丸通りから一本道をはいったところにある。仏光寺までは、歩いてもそう遠くはない。

夏木梨香は、朝六時に起きて、洗面所から覗ける桜の木を見ながら歯を磨いた。四月十九日で、桜はとっくに花を散らし、いつの間にか、緑の新芽がふえていた。

梨香は二十八歳、独身である。しかし、彼女は、この旅荘〈八十八〉の従業員でもないし、また、宿泊客でもなかった。

梨香の勤務先は、東京の〈ベル旅行社〉という小さな会社だった。〈ベル〉は、国内……特に京都を対象としたさまざまな企画を売り出し、それで業界に進出しようとしていた。

彼女は、その尖兵の一人に選ばれたのである。

つまり〈ベル〉は、国内のツアーコンダクター、いわゆるツアコンを養成し、それを売物にするため、梨香のように若いツアコンを、京都の旅館に社費で国内留学させたのだった。

梨香は、四月十日から、二十五日まで、半月間、〈八十八〉で修行することになっていた。

その間に、この〈八十八〉のみならず、京都全体についても勉強することになる。

〈ああ……いつの間にか、もう、十日も過ぎてしまったわ〉

と、梨香は思った。

十日の間に、彼女なりの提案をして、会社とこの旅荘の間をとりもった。特に、京都の桜が終わって、五月の連休までの、ちょっとした端境期に、あまり人に知られ

ていない、この旅荘〈八十八〉を売り出すためには、ひと工夫しなくてはならなかった。

そこで、梨香が考え出したのは、この期間、芥川龍之介の〈羅生門〉という小説を、持参した人に限り、〈八十八〉では、宿泊料に限って、五分引きにするというサービスであった。

もっとも、このアイデアは、梨香のオリジナルではない。

梨香には、香奈という三十二歳の姉がいる。香奈は、旅行評論家としては、最近、相当に知られてきていた。

この香奈が、

「……〈八十八〉みたいな小さな旅館では、いくらかでも、割引かないとダメよ。ただ、その割引には、ちょっとした文学的な、色づけが必要だと思うの。たとえば、芥川龍之介の〈羅生門〉という小説を持って来た人に限るとか……。〈羅生門〉なら、よく知られているし、長い小説じゃないから、持ち歩けるわ」

と、梨香に教えてくれたのだ。

これを、彼女が、会社に提案し、会社の社長がじきじきに、〈八十八〉の経営者と話し合って、このアイデアが実現したというわけである。

この効果はすぐに現われ、チラシが市中に出廻ると間もなく、ポツリポツリと、小説片手に、旅荘の玄関に現われる観光客が来るようになった。

2

「夏木さん……」

と、階下で呼ばれたので、梨香が下りてみると、外線から電話がかかっていた。

「はい、夏木ですけど……」

と、黒電話を取ってみると、それは、姉の香奈からだった。

「どう？　うまくやっている？」

と、香奈は、性格そのままの、ハキハキした調子で訊いた。

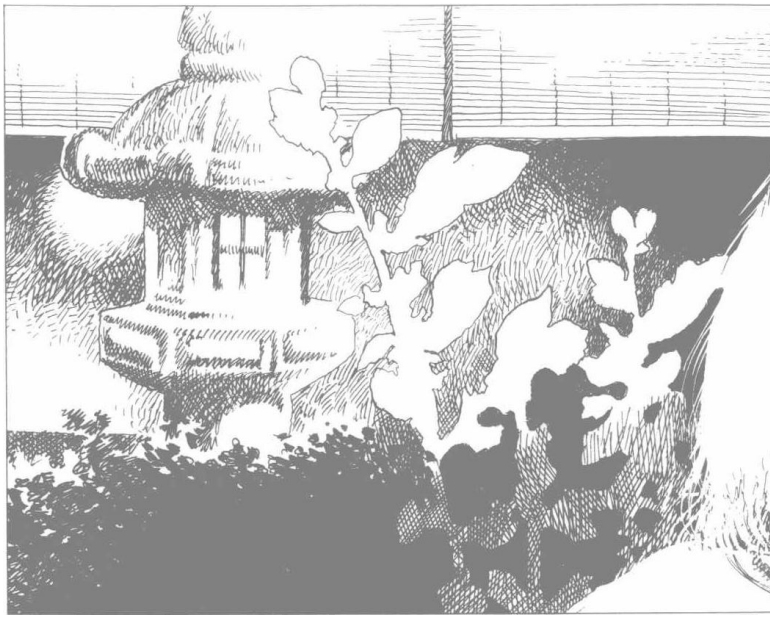
「ええ、なんとか……」

梨香は、少し含み笑いを籠めて言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「それならいいけど……」
「何か用事？」
「たいしたことじゃないのよ。ただ、あなた、この間、旅館の人に、とてもいい提案をしている、と言ったでしょう？　あれ、なんのこと？……気になったから急に訊いてみたくなって……」
　と、香奈は言った。
「ああ、あれのこと？……あれは現物か、今日、できてくるはずよ」
　梨香は、勢い込んだ。
「現物？」
「そうなの、実はね、この旅館には、〈羅生門〉という小説を持って来る人がふえているでしょ。そのことで、私、考えついたのは、この旅館でしか出さないお土産よ」
「……」
「いくら、お土産といっても、値段の高いものはダメでしょ。まさか、羅生門そのものは出せないし……」
「当たり前だわ」
　羅生門は、羅城門ともいい、平安京南の楼門である。
　現在では、すでに、その跡形もなく、来生というその場所には、羅城門遺址の標石が立っているばかりだ。
「そこで私が、思いついたのは、軽くて、安くて、それでいて心に残る、ここのお土産なの」
　と、梨香は言った。
「そんなの、ある？」
　不審そうに香奈が訊いた。
「あるのよ。それは、〈らしょうもんかずら〉という草のしおりよ」
「草のしおり？」
「そうなの。知っているでしょう？　シソ科の多年草の〈らしょうもんかずら〉……」
「雑草でしょう？」
「まあ、そうね。これなら、安く手にはいることが分かったの。この草を干して、ビニールの袋に入れたものを、本の栞にするわけ……」
　と、梨香は、自慢気に言った。
「なんとなく分かってきたわ」
　姉は、受話器の奥で、かすかに、笑った気配がした。

「でしょう？……本を持って来るようなお客さまには、本のしおりはピッタシじゃないかしら？」
「でも……本のほうは、いつまでも、できるわけじゃないし……」
「それはいいのよ。旅館の人、全部が賛成してくれたわ。それで、すぐに今、三百くらいこしらえたの。……たぶん、今日中にできあがってくるはずよ。そうしたら、お客さまに差しあげることになっているわ」
「あなたも、いよいよ、ツアコンのプロになってきたわね」
と、姉は嬉しそうに言った。
梨香が、〈ベル旅行社〉に勤めるようになったのは、香奈の口利きがあったからだが、それだけに、妹思いの彼女は、梨香の成長に気遣いを忘れなかった。
「まだまだよ。でも、しおりのこと、いいアイデアだったでしょう？」
梨香は、姉に褒められて、やはり、得意だった。
「いいわよ。自然の草を使うんでしょう？」
「そうなの」



「そこが、きっと、今の人には、うけると思うの」
「ね……」
「でも……〈らしょうもんかずら〉なんて草、どこで集めるの？」
「そこはよくしたものよ。この草は、春の草だし、京都には、どこの野原にもあるようなありふれた草よ。もっとも、旅館のほうでは、うまくいくようなら、どこかで栽培してもらうようなこと、話しているわ」
「そう」
「芥川の〈羅生門〉を持って来る割引利用客のほうもいよいよ、最後の追い込みなの」
　と、梨香は言った。
「あれは……二十五日まで？」
「ええ。土、日は別にして……。だから、二十一日の月曜日には、いろいろな人がお泊まりになるわ」
「あなたの声を聞いていると、張り切っている様子がよく分かってくるわ。生き生きしているもの」
　と、香奈は言った。
　電話は、それで終わったが、東京のマンションに住ん

でいながらも、京都の自分のことを心配してくれる姉の存在は、とても、ありがたかった。

このとき、たったの今、話題になっていた〈らしょうもんかずら〉のしおりが、業者の手で、まとめて〈八十八〉へ納入されて来たのである。

3

四月二十一日の朝、新幹線〈ひかり〉を降り立ったのは、新門寿久と由美の二人であった。

新門は五十歳。禿あがった額は、精力的な男を想像させ、胡麻塩の毛は、後ろと側面でかなり長く伸びていた。

彼は、風景写真……特に、古美術、仏像、古い社寺建築を撮らせたら、当代一との名声を博した写真家である。

つねに、弟子五、六人をそばにひかえさせ、カメラアングルからピントなど、ほとんどを弟子がやり、自分は、最終的にシャッターを押すだけが仕事だった。

写真家の間では、〈新門一家〉という言葉ができているくらい、彼の力は偉大であった。

この新門が連れて来た女、由美は二十九歳の年増であるが、一見すると、二十四、五には見える。銀座のクラブ〈数寄屋川〉のママだ。

このところ、新門はすっかり、この由美がお気に入りで、なにかというと、彼女を連れて歩きたがった。

今回は、ママの由美のほうから、

「たまには、京都に連れて行って……。芥川龍之介の小説〈羅生門〉を持って行くと、安くしてくれるという京都の旅館があるの。小さなところらしいけど、なんとなく、ロマンティックで面白そう……」

と、モーションをかけてきたのである。

むろん、新門は、これまで、何回となく京都へは足を運んでいる。常宿にしているホテルもあるし、和風旅荘もある。

しかし、〈八十八〉のことは知らなかった。

「そうだな。かえって、そうした珍しいところのほうがのんびりできるだろう」

と、新門は言った。
新門としては、今回の旅のことは、他人に知られたくないと思い、プライベートなトラベルのつもりだった。
しかし、由美のほうは、嬉しいものだから、〈羅生門〉のことや、〈八十八〉の話を、知り合いの者や、〈数寄屋川〉のホステスに話してしまったので、実際は、かなり多くの人が、二人の旅行を知っていた。
そんなわけで、京都の駅頭に降り立った由美のショルダーバッグの中には、〈羅生門〉の文庫本が一冊、納まっていた。
「もう、桜はダメかしら?」
と、由美はタクシーに乗ったときに、呟くように言った。
「遅いよ。それに、この間、風が吹いたから……。ね、運転手さん」
と、新門は声をかけた。
「はい。そうです……」
運転手は生真面目に応えた。
「とにかく、円山公園に行ってみよう。それから平安神宮と……ひとまわりすれば、様子が分かる」
と、新門は、由美の気持ちを忖度して言った。
「〈羅生門〉を見に行きたいわ」
由美が言った。
「ハハハ……それはムダ。そんなものは、とっくに朽ち果てて、今ではありはしないのだよ。確か、石の碑が立っているはずだが、それだけさ」
「そうなの。じゃ……昔の映画で、羅生門というのがあったでしょ?」
「黒沢監督の……」
「そうよ。それを撮ったところなんか、行ってみたかったけど……」
「映画の中に出てくる、羅生門がどこかにあると信じていたわけじゃないだろうね」
新門は、子供に言って訊かせるような喋り方をした。
「まあ、先生ったら……。私を、莫迦にして……。本当に憎らしいわ」
由美はそう言って、新門の太い腕を、ぎゅっと抓った。

4

〈平安閣〉で、昼食をとり、〈平安弁当〉を食べたときに、新門は、ビールと酒をチャンポンに呑んだ。

日常の堅苦しい生活から、解放された新門は、ちょっと羽目をはずして、すっかり酔いがまわってしまった。

〈失敗したかな〉

と、彼は自分でも思った。

それで、食事の後、

「ねえ、先生。……今度は、どこへ連れて行ってくださるのよ」

と、由美に言われたとき、新門は、アルコール臭い息を吐きながら、

「うーん。上賀茂へでも行くつもりだったんだが……」

と、言いながら、もう目はトロンとしている有様だった。

彼は、無理して立ち上がろうとしたが、よろけて、由美の肩にもたれかかった。

「危ないわ、先生……」

「いや、大丈夫」

「大丈夫じゃないわよ。じゃ、こうしましょう。いったん〈八十八〉へ行って、ひと休みしましょう。それで、先生がちゃんと歩けるようになったら、また出かけるの。ね、いいでしょう」

「大丈夫さ」

「ダメ、ダメ……」

こんな会話の末に、〈平安閣〉から、二人はタクシーで、今宵の宿泊先である旅荘〈八十八〉に乗りつけた。

フロントで、女の従業員が、

「おいでやす」

と、迎えてくれた。

由美は、自分のショルダーバッグの中から、文庫本の〈羅生門〉を取り出した。

「これ、持って来たんです。これがあると、割引してくれるんでしょ?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo